
独りの夜

サンソン 琢磨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

独りの夜

【Nコード】

N4951I

【作者名】

サンソン 琢磨

【あらすじ】

大城菖蒲は、大いに失恋した。そして、愛車のフェアレディZでハイウェイをすっ飛ばして旅行だ！

またかよ（前書き）

オトナの女が主人公の失恋旅行のお話です。

またかよ

大城菖蒲。二八歳、独身。

百七〇センチを越える身長に見合うスレンダーな体型に、艶やかな黒髪を腰まで持つ美貌の女。

週末を彼氏の家ですごそうと喜び勇んで足早に賃貸住宅へとマイカーのレッドブラウン系メタリックのZ（ボンネットの長い型）を走らせた。狭い駐車場に早々とバックで滑らせてゆき、入れ込んだ。助手席から少々の野菜と鰻を一尾取って、足早に鉄の階段を駆け上っていく。そして、扉の前に着いた時だった。

何やら楽しげな声が。

しかも彼氏ひとりだけではなくて、女の声まで混ざって聞こえてくるではないか。

これは一体、どういうこと？

相手側を無理矢理に身内と考えても、このいちゃつき具合はなに？ このまま放って置いたらベッドイン確定じゃないの？ てか、アタシとベッドに行く前の段階もこんないちゃつき方をしていたよね。

「公明ー、入るよー」

兎に角、踏み切ってノックをして入ってみた。

すると。

フロアリングの居間のソファーには彼氏と、跨って馬乗りをしていた見知らぬ女がひとり。その上、なかなかの美人ときている。

あー。同じじゃんよ。

ベッドに行く前と。

アタシと居る時と寸分変わらず同じことをしている。

ボーっとして見ていたら、彼氏　　つまり公明が菖蒲の存在に

ようやく気付いたようで、ハツとした顔をした。対照的に、公明の上に乗っかっている女の顔は至極冷静である。ただ者ではない。

馬乗りされたまま菖蒲に顔を向けて、公明は頬を引きつらせて言葉を出していく。

「あ、菖蒲っ！ いいいつの間に来ていたんだ！」

「いちやついていりゃあーノックも聞こえないでしょーよー」

沸々とくる怒り。

青筋を額に浮かばせる。

言い訳できねーぞ。

拳に力が加わってゆく。

「…………。その人は誰？」 姉だの妹だの従姉妹だのと云うんじゃあるめえーな？

その質問の答えは、違う側から返ってきた。

「婚約者…………、いいえ。もっと云ったら私は公明さんの許嫁」

馬乗りの女が菖蒲を見て自己紹介を始めていく。そして、その姿勢から躰を倒してゆくと公明の上に重なって男の胸板に頬を寄せる。震えをみせる菖蒲を挑発するかのようになり、その女は余裕の笑みを浮かべて言葉を出していった。

「寺田屋咲子です、よろしくね。大城 菖蒲さん」

数秒間の沈黙。

「お、おやまあー。こんなに大事な方が居たとも知らずに私ったら二股かけても平然としている駄目野郎なんか浮かれていたなんて出るわ出るわ。

毒が出てくる。

ムツと来た公明。

「なんだと…………」

「公明さんの何処が駄目野郎なんですかつ」

と、思ったら咲子から遮られた。馬乗りを解いて床に降りると、

菖蒲に向き合う。咲子も長身で細身。トレーナーとジーパンというラフな組合せがスタイルの良さを強調している。真っ直ぐと菖蒲を睨み付けるその瞳は、芯から公明を信じていた。

そんな咲子に菖蒲は負けじと靴を荒々しく脱ぎ捨てて、床をドスドスと踏みつけて進んでゆく。そして、ソファの前まで来ると、先ず咲子を睨んだ次は公明に力強く視線を向けた。息を思いつ切り吸い込んで、彼氏に言葉を突き刺す。

「ああ、そうさ。アンタは馬鹿野郎さ！　そしてそんな男に熱を上げていたアタシも馬鹿女さ！」

その言葉に反応して、公明はようやくソファから立ち上がって目をつり上げて菖蒲を睨む。言い返そうかとして口を開いた瞬間、白いブラウスにジーパンの女　　つまりは菖蒲から先手を打たれてしまう。

「なんや！　文句あつとか！」

長崎弁の一刺し。

「今の今までアンタは好いとったけど、もう、よか！　これではつきりしたばい！」

菖蒲の視界に写る公明の顔が揺らぎを持つてくる。しかし、ここで泣くわけにはいかない。そして、菖蒲は腕を真正面に力強く突き出して、公明の顔を目掛けて指差した。

「アンタとはおしまいよ！　もうアタシに電話やメールばやんなっ」

「おいっ！　一方的もいい加減にしろっ。俺にだって言い分がある！」

「やかーしか《喧しい》！！」

菖蒲が踏み込んで放った拳が、反論を始めた公明の顔面へとめり込んだ。メチツと鼻柱の砕けた感触が菖蒲の拳に伝わる。男は赤い飛沫を鼻の孔から吹き上げて、天井を仰ぎながらソファごと後転。そして、菖蒲は二人に背中を向けると、鉄扉を蹴飛ばして玄関から出て行った。

「あのような素敵な方がお遊び相手でしたの、公明さん」

暫く見詰めていた鉄扉から視線を外して、咲子が転倒している許嫁に手を差し伸べて話し掛ける。男は何だか気まずそうに「ああ、まあ」と答えた。

咲子はニコツと微笑んで

「詳しく聞かせてくださる？」

この三ヶ月後に、公明と咲子は籍を入れた。

（序章完結）

Zと傷心旅行一泊二日(前書き)

Zと傷心旅行一泊二日

「ユウウ〜ア〜ソオ〜ウ、ダアア〜ア〜イイ〜!!」
そして、週末。

レッドブラウンメタリックのZが、風を切ってハイウェイを駆け抜けてゆく。菖蒲がヘビメタ系のサウンドをガンガン響かせて窓を全開にして、聴こえてくる英語をそのまま口に出しながらシャウトしていた。オマケに、頭を前後に動かして乗り乗りである。

「ユアデス、ユアデス、ユアデス！ ユウ・ア・ソウ・ドイツ！
！ ファツキンメン！ イイエエ〜ア〜!!」

何だか物騒な歌詞である。

整った色白の顔を勿体無いくらいに眉間と鼻柱とを中心に皺を寄せて、強面を形成して叫んでいた。こうでもしなければ、関係ない人々を殴り飛ばしてしまうだろう。兎にも角にも発散発散発散。

『その小豆色のZ！ おとなしく路肩に寄せて止まりなさい！』

「はあっ！」

血の気が引いた。

全身から。

で。

白バイの逞しき男性二人から事情聴取を受けている。口髭を蓄えた中年男は、大きめなグラサンがイカしていた。

「ちよっとー、七〇キロオーバーだよ。ここは時速八〇キロ制限なんだからね」

「はい……。申し訳ありません……」

怒り任せに飛ばした結果、速度超過違反で減点と罰金と現行犯逮捕とは。菖蒲は肩を竦めて頭を下げていた。

もうひとりの割れ顎の男が口を挟んでくる。

「百五〇って尋常じゃないよね。なにかあったの？」

恥ずかしくて顔を上げられなかった菖蒲は、次は半べそになり始めた。口を強く結んで堪える。

「あ、アタシ……、アタシ……あそ、遊ばれてたんです……。その、人、には……。ほほ本命の女の人が、いて……。許嫁だったんです……っ」

泣く時は独りきりだ。

堪える、堪えろっ。

「そそ、それで……。発……散する為、に……。何処か遠くへ行き、たく、なって……。つい、つい、飛ばして……」

傷心旅行のようだ。

ハイウェイパトロールのポリスマン二人が気の毒そうな顔になり、顔を見合わせて再び菖蒲に目を向けた。

口髭にグラサン男が優しく切り出してきた。

「よし。旅行が終わったら署に来なさい。その時に罰金を払って違反講習の手続きをすれば良いよ」

「あ……。ありがとうございますっ！」

この日ばかりは公安に感謝した菖蒲だった。切符を切られた。

だから今度は安全運転。

やがて。

目的地の温泉街へと到着。

「……」

地図を広げて観光する場所を確かめてゆくと、それは嘗ての彼氏の公明と数回目のデートで訪れた時に巡った箇所と全く同じだった事に気づき、感情が込み上げて半べそ顔に崩れる。

駄目だ。弱くなっている。

気を張っていても昨晚受けたダメージがあまりにも巨大過ぎて、

何だか折れそうな気持ちが心身を占領していた。

怒りと悲しみと想いを込めるだけ込めた必殺の拳を、あの憎き二股男の顔面ド真ん中へと叩きつけてやったのに、心の奥底では未だに未練があるらしい。確かにあの時の公明は憎い。が、菖蒲と付き合っていた時の彼は素敵な存在だった。とてもとても素敵な王子様であつたのだ。しかし、将来を約束した女がいたとは。畜生め、アタシの心と体を楽しんでいやがったなんて。

菖蒲よー。お前これで遊ばれたの何度目だよ。しかも男たちは揃いも揃って許嫁持ちだったじゃねえーかよー。

菖蒲はハンドルに額を付けて、首をうなだれる。

だが、こうしていつまでもウジウジとしているわけにもいかず。気分転換をしなければ、この旅行は始まらない。と、いうことで。

自慢のZを駅前駐車場に預けて活動開始。

温泉街地元民たちによる口コミで評判の旨い料理屋で、ご飯は勿論のこと、地酒も美味しく戴きましたとき。確か、酒は一升を二つばかり空けた。酔っ払った。閉店まで居座っていたらしいが、菖蒲自身は全く覚えていなかったのだ。漸く気づいた頃は、タクシーの後部座席で口を開いて涎を少々垂らして寝ていた。運転手さんからはゲラゲラと笑われて恥ずかしい思いをする。

やがて、車の窓からは予約を取った民間の宿泊ホテルを確認できた。

「運転手さん、ここです。ここをお願いします」

「あいよー。お疲れさん」

三〇年間妻と連れ添って、長女さんはOLをして働いているという、厳つい顔のタクシー運転手から優しく声をかけられた。その何気ない心遣いが身に沁みて、再び涙腺が緩んでしまう。

でも、堪える。

次は露天風呂だ。

溜まった毒気を抜くぞ。

勢いよく入館。

「たのもーっ！」

「ようこそいらっしやいました」と、番頭と女将から快く出迎えられて

「うむ。まずは風呂だ」

その顔は、凜としていた。

「んーっ！ 誰にも見られてないって最っ高ーっ！！」

露天風呂で菖蒲は白い躰をさらけ出して、伸びをして歓喜の叫びをあげた。湯の中に立って、長身を夜風に当てる。お湯は膝まで。生まれて初めて野外で素っ裸になった。しかもそれが快感で堪らない。

風呂から上がった菖蒲はホテル内の酒場で飲み直し、部屋のベッドに飛び込むと大の字になった。今日は寝るだけ寝て、明日は観光を思い切って楽しむんだ。そう決断して、目を瞑って夢の世界へと行く準備に入る。

が。

「ううん……っ」

菖蒲が悩ましげな声を出して寝返りを打った。いや、実際に悩ましい事をしていたのだ。

最っ低！ アタシったらひとりエッチしてやんの……。

横たわる視線の先には、ホテルの十四型テレビが揺らぎを持って崩れ落ちた。目元から滴が高い鼻梁を横に伝ってシーツに流れ落ち、染みを作る。

アイツのことが、まだ好きなんだ……。

数秒間ぼんやりしたのちに、はだけた浴衣を直しつつ室内のバスタブでシャワーを浴びた。そうして気を取り直すと、帯を骨盤辺りでキュッと締めて睡眠に再挑戦。

「よっしゃ。寝るぜ！」

と、その前に。

「ちよつとクーラーでもかけとくかな……？」

扇風機派の菖蒲は、温度設定を熱めに調整して風邪をひかないように心がける。

おやすみ〜。

蒸し暑い。

この蒸し暑さは一体どういうことか？ 引いた汗が全身の皮膚から噴き出して、浴衣を貼り付ける。ベトつきと、湿り気が余計に不快にさせてゆく。苛々してきた。

「……っあああーっ！ ちきしょうつ。熱かつさ！」

雄叫びをあげて、寝返りを打ち天井を睨み付ける。今の菖蒲の苛々度は、MAXに達しようとしていた。再びはだけていた浴衣を直す。起き上がって、殴る物を物色していたのだが、弁償はしたくないので諦めた。

よって、結果は。

飲むか！

よく飲む女である。

まあ、酔いが冷めたから当たり前と云えば当たり前。財布を持って扉へと向かってノブに手をかけて回した。

だが。

普通は開く筈だった。

しかしどうしたことか開かないではないか。音を荒々しく立てて回しても、扉は動かない。

ムツとくる菖蒲。

そんな間にも、部屋は変化を起こし始めていた。

独りの夜

途端に気温が下がってゆく部屋に、違和感を覚えていった菖蒲は、一旦ノブから離れて見渡した。異常は無し。しかし、寒い。下がり方もジワジワとしていやらしいもので、ますます女を苛々させた。何としてでも飲んでやる。

意地になつていたらしい。

と、不意に項うなじを撫でられる感触がしたので再び後ろに目をやると、絨毯を歩く音が聞こえてきた。それは、随分と小さなものがゆつくりと進んでいく音。重量は軽いようだ。そして、その音は駆け足に変わると、テレビの上へと飛び乗ったらしくて箱が多少の揺れを起こした。菖蒲は特にソレを気に止める事なく、扉に向き直ると再び開けにかかる。

至近距離から肩で当て身。

肘を真横にして叩きつける。

拳鎚を使う。

鋭角の膝蹴り。

ちよつと間合いを取る。

真つ直ぐに踵を打ち込んだ。

跳躍して回転蹴り。

更に距離を取る。

片膝を突き、身を沈めた。

ヨーイ。

ドンッ。

シヨルダータックル！

な、なんね……。こいは……。

若干、息を切らした菖蒲が怖さを感じ始めてきた。びくともしな

い。壊れない。これだけやれば、普通は破壊されている筈だ。しかし、どうだ。云とも寸とも言わないではないか。

再び後ろ髪を引かれたので、テレビの方を見てみたら何か腰を下ろしていた。白い息を小刻みに吐きながら、菖蒲はゆっくりと足を進めてゆく。余談であるが、汗ばんだ顔も魅力的。歩きつつ腰まである艶やかな黒髪を襟足で括る。

あれ？　こんなのあったっけ？

首を傾げて見たそれは、西洋人形だった。

それは愛くるしさのある幼女を象っており、ブロンドの髪の毛に大きな碧い瞳にふっくらとした輪郭。多分、ロココ調と思われるピンク色のフリルドレス。まあ、古いか新しいかは不明として。菖蒲は西洋人形の皮の部分に違和感を覚えて、口元を上品に手で隠しながら眉をひそめて覗き込んでみた。するとというか、やっぱりというか、ゴム製と違う。何だか“やけに”生々しいのだ。

見ていたら、気持ち悪くなってきた。人形から顔を離して腕を組んで思考を巡らせる。すると、人形の碧い瞳がこちらを見たような気がしたので、素早く首を向けて凝視。腰に拳を乗せたのちに、更に顔を近付けて人形を見る。見る。見る。見る。ひたすらに、見る。

その行為に飽きてきた頃に、何やら滴る音を聞いたので姿勢を戻すと、その方に振り返って見たら、そこにはベランダの椅子に両脚を抱えて座り込む少女が居た。その姿は、白いワンピースに長い黒髪。やたらと長いみたいだから、多分、少女が立ち上がった時は身の丈と一緒に長さだと思われた。実に華奢な躰つきをしており、四肢もか細い。それに、何故だか全身が水らしき液でぐっしりと濡れていた。しかも、肘の先端と足の指先と毛先から滴が一定間隔を保って次々と絨毯に落ちてゆく。無色透明の“それ”は、若干粘っこいか？　まあ、兎に角、不快には変わりなく。

暫くその少女を見ていたら、何やら鈍い音を入れたので、キョロキョロとした後にその元が解って、再び椅子に体育座りをして

幾本もの白くて細長い触手。窪んだ内壁を伝って、菖蒲の方へと向かってくる。

なんか、これは生理的に嫌悪感が湧き上がってきたぞ。躰の痒くなる感触。オマケに脂汗まで出てきたではないか。鼓動も自身ではつきりと聞こえるほどに、徐々に大きくなってきた。

こ、こういう時ってさ……。どうすればいいの？ どうすればいい？ アタシ、どうすればいいの？ どうすれば……。

菖蒲が思考を駆け巡らせているその間に、幾本もの触手はとうとう少女の顔へと登りつめてきて、眼球のあった場所の周りに先端部分を次々と掛けていった。それら二つが姿を完全に現そうとした、その時。

菖蒲が少女の胸板にヤクザキックをかました。

少女の濡れた躰は、呆気なく後ろへと椅子ごと転倒。情けないものだった。そして、横向になる。少女の顔には元々力が入っていないようだ。そんな横顔を見下ろしていた菖蒲は、何だか踏みつけてやりたくなった。

欲求には正直な菖蒲。

ゆっくりと足を乗せてゆく。

そして、少女の顔を踏む。

すると。

「ぎゃぴ」と、鳴いた。

確認の為に、もうひと踏み。

「ぎゃぴ」

もうひと踏み。

「ぎゃぴ」

愉しくなってきた。

もうひと踏み。

「ぎゃぴ」

あと、一回。

「ぎゃぴ」

オマケ。

「ぎゃぴ」

その行為を繰り返していた菖蒲は、ほくそ笑んでいたのだ。

「ふふ……」

思わず漏れる嘲笑。

そんな愉しいひと時の最中に、開かなかつた鉄扉が口を開けて影を招き入れた。そっち方向にゆっくりと目をやると、そこには全く見知らぬ中年男が立っていたのだ。

その者とは、バーコード禿頭の丸顔で厚い唇に口髭を伸ばした太鼓腹のオヤジ。紺の着流し姿に藍色の帯を締めていた。中年男が菖蒲のもとに歩み寄ってきて、人の良さそうな笑顔でひと言。

「御楽しみ、いただけましたかな？」

菖蒲は無性にムカついたので、その中年男を蹴飛ばした。

横倒れになった太鼓腹の中年男は、目に涙をいっぱい一杯に溜めて菖蒲を力強く睨んで喚く。

「なによ！ なにも蹴飛ばすこと無いじゃないのさっ！ 悪霊をこんな目に遭わすなんて祟って出てやるわよっ！！」

云っただけ云った後に、中年男は「ふー、やれやれ……」と立ち上がり、未だに倒れたままの白い少女の所へと来ると「よいしょ」と肩に担ぎ上げた。そして、ボーっと立ちすすく菖蒲に背を向けて扉まで行った時に立ち止まって振り返り、またひと言。

「覚えてらっしゃい！」

「ばーいばあーい」

担がれた少女が菖蒲に緩い笑顔で手を振ってきたので、それに応えて微笑んで手を振って返した。そして、扉は音を立てずに閉まっ
ていく。

早朝。

小鳥たちの囁ささやりで目を覚ました菖蒲。いつの間に寝ていたのやらだが、寝覚めはスツキリだった。しかも、大の字になっていた上に、またまた浴衣をはだけて、掌サイズの胸と下着を晒していたのだ。この時、忽ち顔に熱を持って赤くなる。そして、素早く胸元と裾を正した。

上体を起こした視線の先には、十四型のテレビ。その上には“あの”西洋人形が腰を下ろしていた。あの晩の出来事は夢ではなかったのだ。そう確信になり始めていた時に、西洋人形がすくつと立つて絨毯に飛び降りて扉へと歩いて行くではないか。

「ぶつ……」噴き出した。

その声に反応したらしく、西洋人形は足を止めて絨毯に唾を吐き捨てて、菖蒲を睨み付けるなりに中年親父の声で投げつける。

「けっ……！ 死に損ないがー！ー！」

「やかーしかっ」

中指を立てた菖蒲。

人形も中指を立て返す。

数秒間の睨み合いの後に、西洋人形は「ふんっ！」と鼻息荒くして扉をすり抜けて出て行った。

直後にフロントから電話が。

「……はい」

『お客様、誠に申し訳ございません。お客様のお泊まりになられていますお部屋には“出る”のですよ。』

「……で。出ましたか？」

「はい」

『ああ〜っ！ すみません。こちらの連絡不行き届きでございました。誠にすみませんでした』

「いいえー」

何だかムカついた。

電話の後に露天風呂に行って汗を流しきり、着替えてフロントへと手続きを取ってホテルを出た。

その後といったら、昼まで観光を楽しんで旨い飯を食べて、駅前の駐車場へと戻って自慢のフェアレディZに乗り込んだ。バックミラーに写ったモノに気が付いて、それを見ると、菖蒲は微笑みかけた。

後部座席には、あのホテルで遭遇した白いワンピースの少女が腰を掛けており、何だか気恥ずかしいそうに俯いている。だが、今は不快感は無い。菖蒲がハンドルを握って少女に快く声をかける。

「アタシ、長崎だけどさ。どうする？ついて来る？」

それに対して少女は頬をほんのりと赤くして笑みを見せると、「うん……」と頷いた。

「飽きるまで居ていいからね」

そう云った菖蒲の顔は、何か吹っ切れた爽やかなものであった。

『独りの夜』 完結

独りの夜（後書き）

おわかりいただけただろうか。大城菖蒲の周りに次々と起こってゆく不可解な現象が……。傷心旅行であろうがなかるうが、それに関係なく異界の住人たちは姿を見せるのである……。『ほんとにあった！呪いのビデオ』のナレーション風に）

自分の拙作を読んでいただきまして、ありがとうございました。

大城菖蒲は性格を除いて、あとは自分の好みのタイプです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4951i/>

独りの夜

2011年1月12日23時11分発行